

2024年度 小論文

2023年11月18日実施
海洋生命科学部 海洋生命科学科

受験番号		氏名	
------	--	----	--

【注意事項】

1. 試験監督(試験開始)の指示があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 試験時間は60分です。
3. この問題冊子は1ページから3ページまであります。
4. 試験監督の指示により、問題冊子と解答用紙に**受験番号**および**氏名**を記入しなさい。
5. 試験中に問題冊子および解答用紙の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および汚れ等に気づいた場合は、手を高く挙げて試験監督に知らせなさい。
6. 試験終了後、問題冊子と解答用紙はともに机の上に置いておくこと。持ち帰ってはいけません。

問題 以下の文章を読んで、問1と問2に答えよ。

海が、私たちの出すごみによって汚染されている。テレビや新聞で報道される機会も増えたことで多くの人がこの事実を認識しているが、海洋ごみの実態や発生のメカニズム、その影響についてはあまり知られていない。実は、海に面する192の国や地域のうち、海に流出したプラスチックごみの年間流出量の割合を見ると、日本は全体で30位、先進国では20位のアメリカに次ぐ2番目の多さであることがわかっている。海洋生物はもちろん、人間にも悪影響を及ぼすと言われる海洋ごみの増加に歯止めをかけるために、私たちにできることはいったい何だろうか？

海洋ごみとは、海岸に打ち上げられた「漂着ごみ」、海面や海中を漂う「漂流ごみ」、そして海底に積もった「海底ごみ」の総称を指す。その内訳として最も多いのが、釣り糸や食品の容器・包装袋など、プラスチック製のもの。一度使えばすぐに捨ててしまう、いわゆる「使い捨てプラスチック」のごみが抜きん出て多いのだ。環境省の調べによると、世界では毎年少なくとも800万トンものプラスチックごみが海に流出しているという。これは、東京スカイツリーおよそ222基分に相当する重量だ。そのうち毎年2～6万トンのプラスチックごみが日本から流出していると推計されている(2010年時点)。

この海に流出している大量のプラスチックごみは、当然海に暮らす生き物に悪影響を及ぼしている。たとえばインドネシアの海岸では先日、6キロ近いプラスチックごみを体内に溜め込んだマッコウクジラが打ち上げられた。プラスチックのコップ115個、ペットボトル4個、レジ袋25枚、ビーチサンダル2足と、その体からおびただしい量のごみが発見されたそうだ。また海で死んでしまったウミガメ102頭の内臓を調査したところ、すべての個体からマイクロプラスチックをはじめとする合成粒子が800以上見つかった。いずれもごみが直接的な死因につながったのかは判明していないが、海の住民たちが被害を受けていることは間違いない。現在世界の海に漂う海洋ごみの量は、総計約1億5,000万トンに達しているといわれる。そしてこの瞬間もどんどん増え続けている。つまり何もしなければ、海洋ごみは増加の一途をたどるのだ。このペースで進めば、2050年には魚よりプラスチックごみの量が多い海になることが予測されている。

そんな海洋ごみについて、日本人はどう受け止めているのだろうか。2018年11月に日本財団が行った「海洋ごみに関する意識調査」の結果を見ると、「海洋ごみ」という言葉自体は、8割以上の人を知っていると回答しており、広く認知されているようだ。また、海洋ごみ削減のために主体的に動くべき対象としてメーカー、政府、地方自治体だけでなく、約8割の人が個人の取り組みも重要であることを認識している。しかし、海洋ごみの“実態”を知る人はまだまだ少ない。アンケートの結果をしてみると「海洋ごみ」と聞いて思い浮かぶものに、現実との差があることが分かる。想起率が5割を超えるのは、ペットボトル、レ

ジ袋(ビニール袋), 発泡スチロール, ビン・缶。特にペットボトルやレジ袋の想起率が7割近い一方で, 実際にごみとして多い釣り糸や漁具, 食品の包装袋や容器は5割にも満たない。もしこのまま海洋ごみに対する問題意識が高まっていったとしても, みんなで認識を合わせなければ, 海洋ごみを削減するための行動が結果につながらないかもしれない。

(日本財団ジャーナル, 2022年8月25日, 一部改変)

問 1. 以上の文章を150字以内で要約せよ。

問 2. 下線部の問題を解決するために必要と思われる対策について, あなたの考えを650字以内で述べよ。